

『歎異抄』第9条（前半）  
～唯円房のふたつの問い～

【第9条・本文】

5 念仏申し候へども、踊躍歡喜のころおろそかに候ふこと、またいそぎ浄土へまゐりたきころの候はぬは、いかにと候ふべきことにて候ふやらんと、申しいで候ひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天にをどり地にをどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふなり。よろこぶべき  
10 ころをおさへて、よろこばざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごとし、われらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。

また浄土へいそぎまゐりたきころのなくて、いささか所勞のこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。久遠劫より  
15 いままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養浄土はこひしからず候ふこと、まことによくよく煩惱の興盛に候ふにこそ。なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり。いそぎまゐりたきころなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じ候へ。  
20 踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へもまゐりたく候はんには、煩惱のなきやらんと、あやしく候ひなましと [云々]。

【現代語訳】

念仏しておりますも、おどりがあがるような喜びの心がそれほど湧いてきま  
25 せんし、また少しでもはやく浄土に往生したいという心もおこってこないのは、どのように考えたらよいのでしょうかとお尋ねしたところ、次のように仰せになりました。この親鸞もなぜだろうかと思っていたのですが、唯円房よ、あなたも同じ心持ちだったのですね。よくよく考えてみますと、おどりがあがるほど大喜びするはずのことが喜べないから、ますます往生は間違いないと思うので  
30 す。喜ぶはずの心が抑えられて喜べないのは、煩惱のしわざなのです。そうしたわたしどもであることを、阿弥陀仏ははじめから知っておられて、あらゆる煩惱を身にそなえた凡夫であると仰せになっているのですから、本願はこのようなわたしどものために、大いなる慈悲の心でおこされたのだなあと思ふかされ、ますますたのもしく思われるのです。

35 また、浄土へはやく往生したいという心がおこらず、少しでも病気にかかる

と、死ぬのではないだろうかと思われの、煩惱のしわざです。果てしなく遠い昔からこれまで生れ変わり死に変わり続けてきた、苦悩に満ちたこの迷いの世界は捨てがたく、まだ生れたことのない安らかなさとりの世界に心ひかれ  
5 ないのは、まことに煩惱が盛んだからなのです。どれほど名残惜しいと思っ  
ても、この世の縁が尽き、どうすることもできないで命を終えるとき、浄土に  
往生させていただくのです。はやく往生したいという心のないわたしどものよ  
うなものを、阿弥陀仏はことのほかあわれに思ってくださいなのです。このよ  
うなわけであるからこそ、大いなる慈悲の心でおこされた本願はますますたのも  
しく、往生は間違いないと思います。

10 おどりあがるような喜びの心が湧きおこり、また少しでもはやく浄土に往生  
したいというのでしたら、煩惱がないのだろうか、きっと疑わしく思われる  
ことでしょう。

このように聖人は仰せになりました。

15 **【解説】(梯 實圓和上『大きな字の歎異抄』186頁)**

この条は、親鸞聖人と唯円房の対話をなまなましく伝えています。唯円房の問  
いというのは、念仏往生の教えの領解をめぐる二つの問題についてでした。念仏  
してはいるけれども、経に説かれているような、「踊躍」(おどり、はねる)する  
ほどの法悦が自分には湧きあがってこないということと、一刻もはやく浄土へ生  
20 まれたいという切実な願生のおもいが起こらないということでした。

それに対して聖人は、まず「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこころ  
にてありけり」といって、ご自身の問題として引き受け、その喜べないという現  
実こそ、如来の救いの確かさを味わうべき場であると諭されるのでした。喜ぶべ  
き尊い念仏をめぐまれていながら、それをまともに喜ばない、浅ましい姿こそ、  
25 阿弥陀仏がまさしく救済しようと思立たれた煩惱具足の凡夫の実態ではないか。  
してみれば、このわが身こそ救われるべきものであったと思知られるではない  
か。

また浄土を願生しながら、苦悩の娑婆を厭いきれず、浄土は、さとの領域で  
あり、永遠な「いのち」の故郷であると聞かされても、それを慕う心がおこらな  
30 いということは、よくよく煩惱に翻弄された身といわねばならない。しかし如来  
の大悲はそのような愚かなものを、ことに哀れみたまうと聞かせていただいで  
いるから、たのものしいではないか、といわれています。

**■唯円房のふたつの問い(唯円房の苦悩)**

35 ※前半の10条のうち、この第9条のみに問いが記されている。

念仏申し候へども、踊躍歡喜のころおろそかに候ふこと、またいそぎ浄土へま  
ありたきころの候はぬは、いかにと候ふべきことにて候ふやらんと、申しいれ  
て候ひしかば…

5 念仏しておりましたも、おどりあがるような喜びの心がそれほど湧いてきませ  
んし、また少しでもはやく浄土に往生したいという心もおこってこないのは、  
どのように考えたらよいのでしょうかとお尋ねしたところ…

**問① 念仏しているけれども、喜びの心が起こらない。**

**問② 一刻も早くお浄土へ生まれたいという願生の思いが起こってこない。**

10 ⇒「このようなことで、果たして念仏往生の教えにかなっているのだろうか」と  
いう問い

### ※唯円房の問いの背景

**問① 念仏しているけれども、喜びの心が起こらない。**

15 ⇒ 経典に説かれる内容とのギャップ

『仏説無量寿経』（註釈版 81）

20 仏、弥勒に語りたまはく、「それかの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃  
至一念せんことあらん。まさに知るべし、この人は大利を得とす。すなはちこれ  
無上の功德を具足するなりと。このゆゑに弥勒、たとひ大火ありて三千大千世界  
に充滿すとも、かならずまさにこれを過ぎて、この経法を聞いて歡喜信樂し、受  
持読誦して説のごとく修行すべし。

25 釈尊が弥勒菩薩に仰せになる。「無量寿仏の名を聞いて喜びに満ちあふれ、わず  
か一回でも念仏すれば、この人は大きな利益を得ると知るがよい。すなわちこ  
の上ない功德を身にそなえるのである。だから弥勒よ、たとえ世界中が火の海  
になったとしてもひるまずに進み、この教えを聞いて信じ喜び、心にたもち続  
けて口にとなえ、教えのままに修行するがよい。

30 ⇒「南無阿彌陀仏」の名号の救いを聞き、私を救う如来のましますことを信知し、  
天におどり地にはねるほどの喜びをもって、わずか一声でも「南無阿彌陀仏」と  
称える者は、無上の功德が与えられ、必ず仏の悟りを開くことのできる尊い利益  
をさずけられることが『無量寿経』に説かれている。

### 親鸞聖人の和讃

35 『浄土和讃』（註釈版 561）

阿弥陀仏の御名をきき 歡喜讚仰せしむれば  
功德の宝を具足して 一念大利無上なり

阿弥陀仏の名号を聞き信じ、喜んでほめたたえるものは大いなる功德を身にそ  
なえ、浄土に往生してさとりを開くというこの上ない利益を得るのである。

5

たとひ大千世界に みてらん火をもすぎゆきて  
仏の御名をきくひとは ながく不退にかなふなり

たとえ世界中が火の海になったとしても、ひるまず進み、阿弥陀仏の名号を聞  
き信じる人は、決して迷いの世界にもどることのない身となるのである。

10

經典にはたとえ三千大千世界に火が満ちていても、その火のなかをくぐってでも、  
この教えは聞かなければならないほどの教説であり、真実の教えであると、釈尊  
が弥勒菩薩に説かれる。

15 **問② 一刻も早くお浄土へ生まれたいという願生の思いが起こってこない。**

⇒ 後世者たちの浄土願生の姿とのギャップ

「厭離穢土 欣求浄土」

・〈穢土を厭い離れて、浄土を欣い求める〉という浄土教の旗印。

20 ・『往生要集』に説かれる「厭離穢土」と「欣求浄土」の教説。

・浄土の教えは、一刻も早く煩惱に穢れた迷いの世界である「穢土」を厭い離れ  
て、清らかな悟りの領域である「浄土」を欣い求めるべきだと主張する、後世者  
の存在。

25 ○『一言芳談』（常陸の敬仏房の逸話）

**常陸の敬仏房**

・法然聖人の弟子

・後に高野山（蓮華谷聖）の明遍僧都に師事

30 或時仰せらるる、年来死をおそれざる理をこのみ、ならひつる力にて、此所労も  
すこしよき様になれば、死なでやあらんずらむと、きものつぶるる也。（中略）し  
かればあひかまへて、つねに此身をいとひにくみて、死をもねがふ意樂をこのむ  
べき也。（『古典文学大系』83・196頁）

35 浄土をねがう者は、死をおそれてはならないという道理を、長年にわたって好  
みならってきたおかげで、この病氣も少し快方に向かうと、死なずにすむので

はなかりと、肝のつぶれるほど切なく感ずる。(中略) だから浄土を願うほどのものは、是非とも、つねにこの煩惱の身を厭い憎んで、死をも好み願うほどの心がまえをもつべきである。

- 5 ⇒ 浄土を願うほどの者は、この煩惱の身を厭い憎んで、死をも好み願うほどの心構えを持つべきであるとの主張。

### ○『一言芳談』(松陰の顕性房の逸話)

#### 松陰の顕性房

- 10 ・高野山、蓮華谷聖の明遍僧都の弟子  
・晩年は京都山科の勧修寺の裏の松陰山へ隠遁

15 我は遁世の始よりして、疾く死なばやと云事を習ひしなり。さればこそ、三十余年間、ならひし故に今は片時も忘れず。とく死にたければ、すこしも延びたる様なれば、むねがつぶれて、わびしき也。(『同上』207頁)

20 世俗の地位や名誉や財産への執着をふりすてて、世間に背いて出家したときから、一刻も早く浄土へ生まれたいと思い、「早く死にたいものだ」と思えるほどになろうと修行してきた。そればかりを三十余年のあいだ思い続けてきたおかげで、今では片時も自分の「死」を忘れることもなく、すみやかに死んで浄土へ生まれたいと思っている。だから病気がよくなって、死が少しでも先へ延びるようだと、胸がつぶれるほど、わびしく思う。

- 25 ⇒ 敬仏房と同じく、この世をなるべく早く切りあげて、速やかな浄土往生を願う心境が語られている。

30 『無量寿経』には「命を捨てても惜しくない」ほどの価値を持つ真実の教えであるからこそ、この上ない喜びの心が起こってしかるべきである。にもかかわらず、自分は教えを聞いているのにそのような喜びの心が起こってこない。また、「後世者」のように、浄土を願う強い想いも起こってこない。このままではいけないのではないか、自分は念仏の教えに背いているのではないか、という想いが、唯円房の抱えていた深い悩み。

**梯 實圓『聖典セミナー 歎異抄』**（本願寺出版社・246頁）

5 本願の名号は、それを聞きえたものの生を充実せしめ、死をも超えて豊かな実りをあらしめたまう真実の法であり、無上の功德でした。…《中略》…それほど価値をもった真実の法に遇わせていただいているのですから、念佛者は、まさに経に説かれたとおり、天におどり地におどるほどの「踊躍歡喜」の思いが  
10 湧き起こってこないのはどうしたことなのだろうかと思うと、いたたまれない気持ちになったのです。それは真剣に教えを聞き、教えのとおりになろうとする人だけが感知する、教法と自身との間にひろがる不気味な間隙だったのです。

**■問①に対する親鸞聖人の応答**

15 親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天にをどり地にをどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふなり。よろこぶべきころをおさへて、よろこばざるは煩惱の所為なり。…

20 この親鸞もなぜだろうかと思っていたのですが、唯円房よ、あなたも同じ心持ちだったのですね。よくよく考えてみますと、おどりあがるほど大喜びするはずのことが喜べないから、ますます往生は間違いないと思うのです。喜ぶはずの心が抑えられて喜べないのは、煩惱のしわざなのです。…

**■問②に対する親鸞聖人の応答**

25 また浄土へいそぎまゐりたきころのなくて、いささか所労のこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。（中略）  
いそぎまゐりたきころなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じ候へ。

30 また、浄土へはやく往生したいという心がおこらず、少しでも病気にかかると、死ぬのではないだろうか心細く思われるのも、煩惱のしわざです。（中略）  
はやく往生したいという心のないわたしのようなものを、阿弥陀仏はことのほかあわれに思ってくださいなのです。このようなわけであるからこそ、大いなる慈悲の心でおこされた本願はますますたのもしく、往生は間違いないと思います。